

目指せ！！学生満足度 120%

昭和時代(D班3グループ)

1、課題認識・問題提起(PLAN)

A、現状の課題認識

大学全入時代、高度情報化社会への移行、その他の諸要因が重なり近年、学生が学生であることの意識低下が気になるところである。具体例としては、中退率や留年率の上昇、愛校心の低下、学生の覇気を感じられない、不本意入学者の増加などが挙げられた。

B、Aを踏まえたうえでの問題提起

上記のような症例が多々見受けられるのも、学生の満足度が低いという点に起因するのではないかと仮定した。「学生の満足度を向上させる」という目標を掲げ、この目標に向けて議論を行った。

2、討議による対策(DO)

このテーマに取り組むに当たり、まずはブレインストーミング、ポストイットによる“満足度を高めるためには、どのような手段があるのか”という洗い出しから始めた。その後、これらの意見を集約し下記プロット図にまとめ、グループ化と優先順位付けを行った。

A、【ポストイットにて洗い出した具体例】

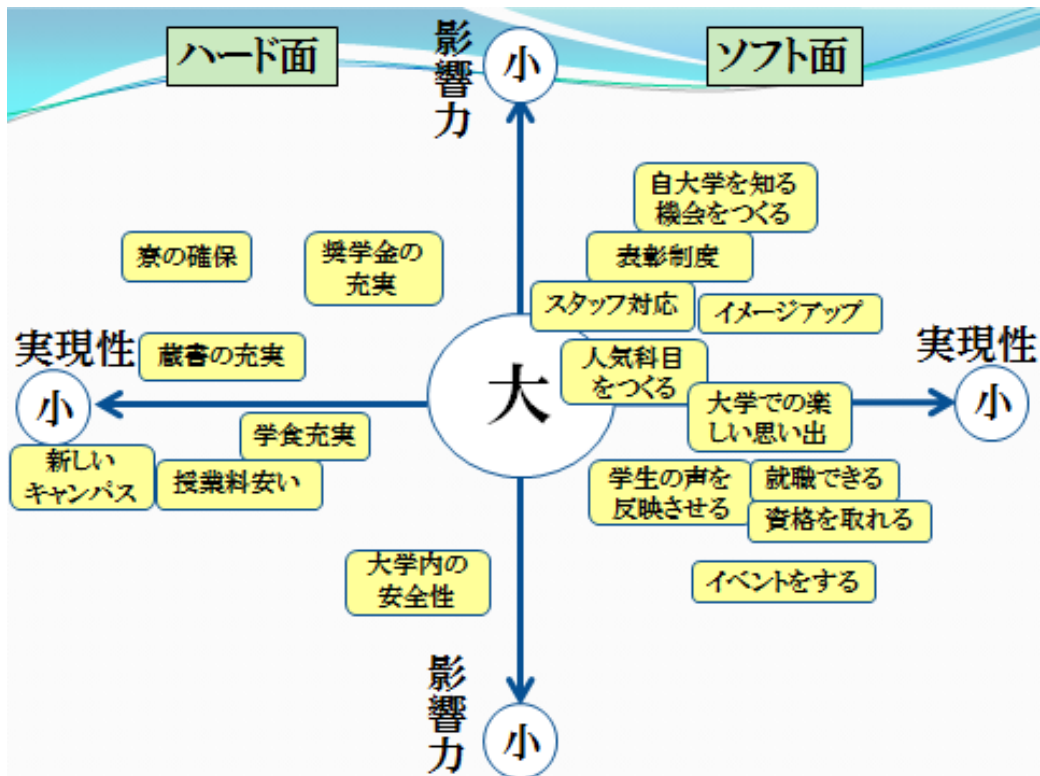


図 1：学生満足度向上策の分布

B、【グループ化の結果】

教育・対応面、制度面、施設面という三項目に分類をした。そして各項目の対策をグループで再度議論・検討し、各項目を掘り下げた。

C、【各グループでの対策と具体例】

教育・対応面においてはニーズの把握を最優先する。アンケートによる学生ニーズの吸い上げ、新規科目の創設、窓口担当者の導入などを検討・実行する。また、職員能力の向上も必須であり、教職員研修にて自学を学ぶ機会をつくり、学生に対しても同様のセミナーを行う。これにより、学生にも愛校心が芽生えるきっかけとなる。

制度面においては、奨学金や表彰制度を導入し経済的負担の軽減を図り、学食の改善、新キャンパスの設置や国際寮の設置等を行うことにより施設面での充実を目指す。

D、【Cから見えてくるもの】

これらに全て共通してくるのは、情報の共有化の重要性、学生・教員・職員を巻き込んだ動きが必要となってくるということである。この二点に重点を置き、下記のようなイメージ図でまとめた。

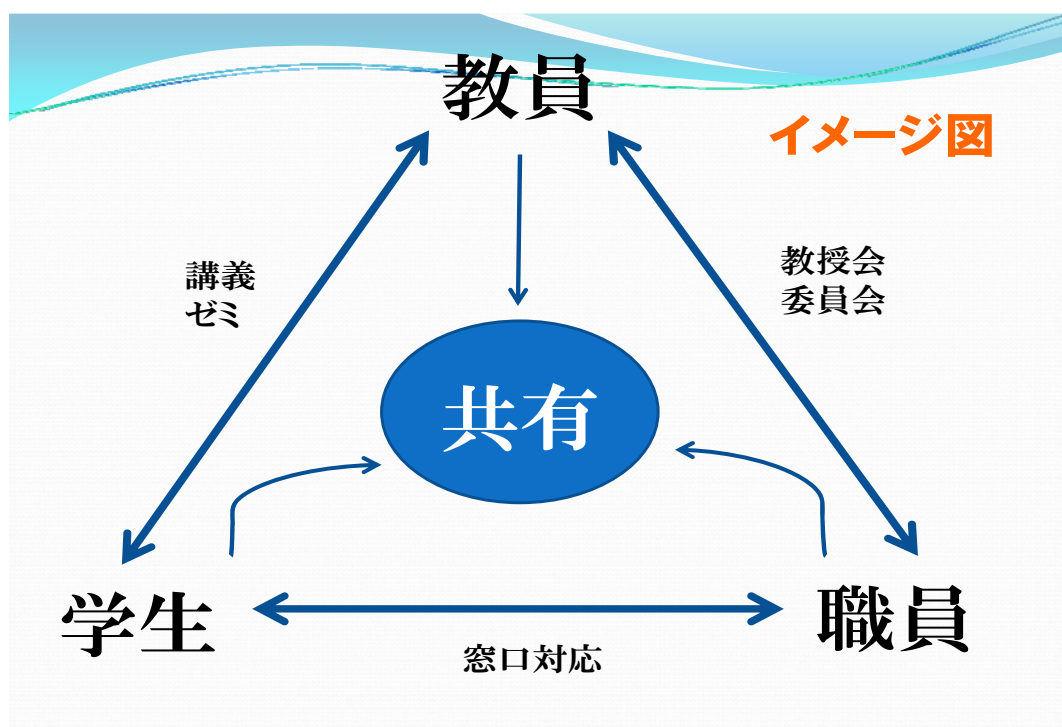


図 2：情報共有化のイメージ図

3、評価と検証(CHECK)

情報の共有化、そして三者を巻き込んだ働きは可能となるかも知れないが…

学内教職員が取れうる動きのみに終始する→ 社会との隔絶が生まれる

学生の主体性をどう伸ばすのか？→ 学生たちの達成感をどう醸造するのか？

この問題点を解決しなければ、学生満足度は 120%に到達しないのでは？ (100%止まり)

4、更なる一歩(ACTION)

学生を社会につなげていくシステムの構築が必要であると同時に、社会を意識した取り組みを積極的に行っていく必要があるのではないか？

社会という枠を設けることにより、社会人基礎力の向上にも繋がる。

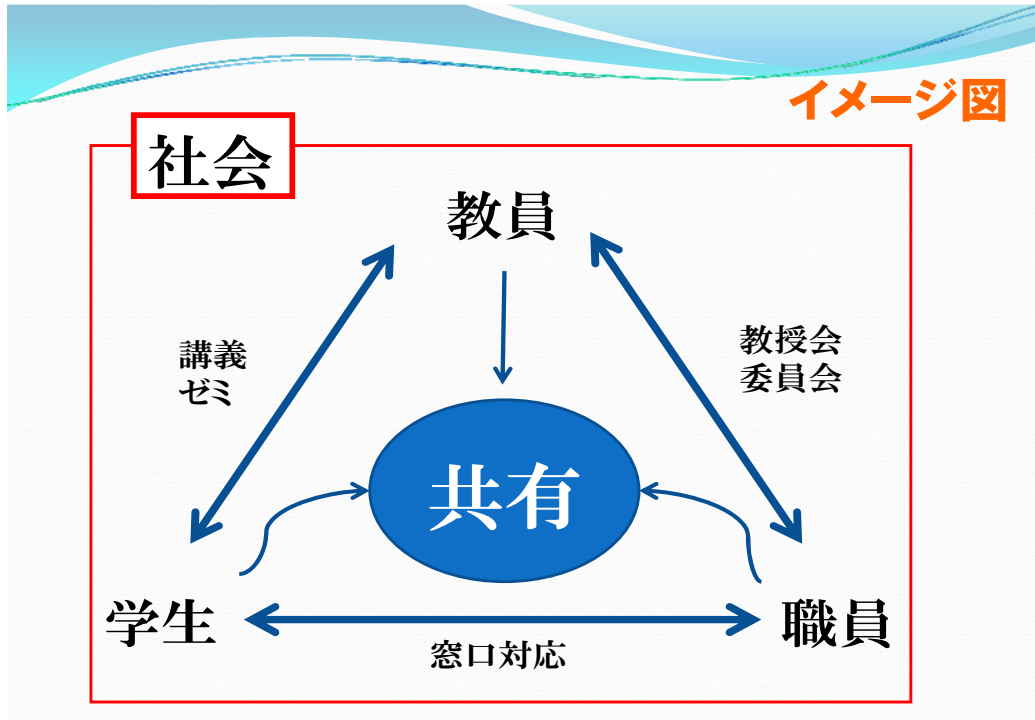


図3：社会という枠を設けた情報共有化のイメージ図

実務家による講義→著名人を招待しての公演会・講義(S大学、C大学)

学生の主体性を伸ばす制度導入→アクティブ・プログラム(K大学)、学生の“やる気”を応援する奨学金(C大学)、ボランティア活動による単位付与(H大学)など

5、総括

私達職員に出来ることは、前例にとらわれることなく、社会のニーズ・時代のニーズに合った人材の輩出を常に意識して、行動し続けることである。それにより学生満足度は100%から、120%にまで上昇するという結論に達した。

所感

グループ討議を通して、各大学の課題に共通点多々あることや、その課題に対しての意識や取り組み方など共有可能な部分もあり、大いに参考になった。

情報を活用することにより学生の自主的な成長を活性化出来る点や、社会と繋がりを持つプログラムを制定可能となる点には今後の大きな可能性を感じた。